一般講演

1 植生の変化とツツガムシ：鹿児島県加世田市における再調査 ○山本 進、松下敏夫（鹿大・医・衛生）野田伸一（鹿大・医・医動物） Change of vegetation and trombiculid mites: Re-investigation in Kaseda City, Kagoshima Prefecture Yamamoto S., Matsushita T., Noda S.

植生の変化がツツガムシ相に及ぼす影響を調べる目的で、1959～1960年に調査を行った加世田市の潟村・溝村・佐方および内田の4地区で再調査を実施した。各調査地区の植生は前回の調査時にはタブノキとスダジイの林であったが、25～30年前に潟村はミカンの畑、溝村・佐方および内田はスギ林に変わった。山間の佐方と内田ではツツガムシの種類数は変化していなかったが、以前から人為的な影響が強かった潟村と溝村では、ツツガムシの種類数は半減していた。今回の調査でスギ林で多種類のツツガムシが採集され、鹿児島県でツツガムシ病を媒介していると考えられるタテツツガムシの個体数も多かった。鹿児島県のツツガムシ病の多発地区ではスギ林の面積が広く、少なくとも鹿児島県においては、スギ林もツツガムシの重要な生息地と考えられた。

3 北部タイにおけるネッタイシマカとヒトスジシマカ幼虫の発生消長：産卵トラップによる調査結果
津田良夫○、高木正洋（長大・熱研・生物環境）、Wannapa Suwonkerd、Somsak Prajakwong (Office of Vector Borne Disease Control No.2, Thailand)
Ovi-trap survey of *Ae. aegypti* and *Ae. albopictus* in northern Thailand
Tsuda Y., Takagi M., Suwonkerd W. and Prajakwong S.

北部タイ・チェンマイ市の OVBDC で、6つの建物の周辺にプラスチック容器20個を設置し、*Ae. aegypti* と *Ae. albopictus* 幼虫の季節消長と場所による発生数の違いを調査した。*Ae. aegypti* の幼虫密度は7月に最も高く、その後10月に一時的に低下したが11月から12月にかけて再び上昇した。*Ae. albopictus* の幼虫密度は12月まで比較的高い密度を維持し、その後低下して4月以降に増加傾向を示した。2種の幼虫の空間分布には重なりがあるものの、多数の幼虫が発生する場所は異なっていた。

2 ブユ属(*Simulium*)のミトコンドリア16SrRNA領域における系統分類学的研究 ○大塚 靖、青木千春、高岡宏行（大分医大・感染予防医学） Phylogenetic analyses of blackflies from sequences of mitochondrial 16S rRNA gene. Yasushi Otsuka, Chiharu Aoki and Hiroyuki Takaoka.

ブユ属(*Simulium*)の系統分類に関して形態学的手法のみでは多くの問題がある。これらを解決する一つとして東洋区および旧北区産の4亜属に含まれる11種のブユ属(*Simulium*)のミトコンドリア16S rRNA領域の523baseの塩基配列を決定し、これまで知られていたブユ属5種とあわせて系統樹を作成した。この系統樹ではこれまでの形態学的分類（亜属、種グループレベル）とはほぼパラレルな関係となった。さらに上記の11種のうち *S.aokii*, *S.sarakawae*, *S.suchidai* の3種についてはミトコンドリア cytochrome oxidase I (COI)領域の487baseの塩基配列を決定した。*S.aokii*, *S.sarakawae*, *S.suchidai*, *Anopheles gambiae* と *Drosophila yakuba* について今回塩基配列を決定した16S rRNA領域とCOI領域で置換率を比べると、属間(*Simulium*, *Anopheles*, *Drosophila*)の置換率は16S rRNA領域とCOI領域ではそれほど変わらないのに対し、ブユ属の種間(*S.aokii*, *S.sarakawae*, *S.suchidai*)ではCOI領域が16S rRNA領域の3.5～17倍にもなっている。よって近縁種間で変異を調べるにはCOI領域が効率的だと思われる。

今回のブユ属(*Simulium*)のミトコンドリア16S rRNA領域及びCOI領域の塩基配列により系統関係を調べることは十分出来るが、さらに詳しい系統関係を調べるには多くの塩基、多くの領域で配列比較と形態的系統分類との関係を考えることが必要で、そのことはブユ属の機能・生態の推測、進化を考えるのに有用だと思われる。